

Title	長尾琢磨君博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.3 (2022. 10) ,p.53 (227)- 61 (235)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20221000-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長尾琢磨君博士学位請求論文審査報告

論文題目

「第二神殿時代後期のユダヤ人の石切墓

——形態・分布が示すヘレニズムに対する相克」

論文の概要

長尾琢磨君の博士学位請求論文は、第二神殿時代後期（セレウコス朝期）紀元七〇年のエルサレム陥落まで）においてヘレニズムと直面することになったユダヤ人が、どのようにそれと向き合い自らの文化・思想を形成していったのかを東地中海沿岸南部地域の石切墓埋葬に関する考古学的研究からあきらかにするものである。「ユダヤイズム（ヘブルイズム）とヘレニズム」は古代ユダヤ教研究における一つの大きなテーマであり、古代ユダヤ教が成立する過程でどの程度ヘレニズムの影響を受けたのかを検討することは現在のユダヤ教、キリスト教理解にも資するものである。このテーマについてはこれまで文献史料研究を中心にさかんに行われてきたが、考古資料からユダヤイズムとヘレニズムの関係を探る研究は多くない。しかし、墓は当時の人々の死生観や文化を色濃く反映する遺構であり、これまでの調査によつてすでに多量の情報が蓄積されてきている。本論はこれらの資料を活用し、知られている石切墓遺構の全体を一定の基準で分析することで、第二神殿時代後期におけるユ

ダヤイズムとヘレニズムの相克を新たな視点から検討することをめざしたものである。

論文の構成

序章 本研究の目的と視座

第1節 本研究の目的

第2節 ユダヤ人の埋葬から考えるヘレニズム化

第3節 本研究の構成

第1章 第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研究

第1節 第一神殿時代～第二神殿時代前期におけるユダヤ

人の埋葬に関する研究

1 当該期の埋葬の概要

2 鉄器時代の埋葬の研究

第2節 第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究

1 当該期の埋葬の概要

2 埋葬方法の研究

3 墓の形態の研究

4 ユダヤ地域のロクリ墓の起源の研究

第3節 第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する考古学的

研究の課題

第2章 第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷

第1節 はじめに

第2節 対象遺跡

- 1 エルサレムの墓地
 - 2 マレシヤの墓地
 - 3 アレキサンドリアの墓地
- 第3節 対象資料の年代決定について
- 第4節 ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較
- 1 墓の内部形態による比較
 - 2 墓に入るまでの構造による比較
 - 3 考察
- 第5節 エルサレムにおける初期ロクリ墓とベンチ墓の比較
- 1 墓の内部形態による比較
 - 2 考察
- 第6節 エルサレムにおけるロクリ墓の変遷
- 1 墓の内部形態による比較
 - 2 考察
- 第7節 おわりに
- 第3章 パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布——ユダヤ・サマリア地域間の事例から
- 第1節 はじめに
 - 第2節 パレスチナ自治区における文化財管理—墓地の事例から
 - 1 パレスチナ自治区における考古学的調査の状況
 - 2 パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況
 - 3 パレスチナ自治区の墓に関する考古学的踏査
- 第4章 第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化
- 第1節 はじめに
 - 第2節 第二神殿時代後期の東地中海南部地域における領域の変遷
 - 第3節 地形、地質、居住地、街道からみる墓地の立地
 - 第4節 前二世紀から前一世紀の東地中海南部地域における墓の分布
 - 1 前二世紀における墓の分布
 - 2 前一世紀における墓の分布
 - 3 一世紀における墓の分布
- 第5節 おわりに
- 終章 結論

参考文献

各章の要約

序章では、本論の研究目的と方法論が提示されている。ヘレニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユダヤ人がそれとどのように向き合い自らの文化・思想を形成していったかを当時の石切墓の考古学的分析から説明することが本論の目的である。ヘレニズム化を考える際、それは単純に受容されたものではなく、反発も含めてさまざまな応答があったことが知られている。本章では、文献史料のみならず埋葬という当時の人々の死生観や文化と深く関わる墓の考古学的分析を通してこの研究課題に取り組むことの有用性を論じ、本論の構成を俯瞰的に示している。

第1章は、ユダヤ人の埋葬に関する先行研究の整理及び残された課題の抽出にあてられている。本論の直接の対象となる第二神殿時代後期の墓だけでなく、それに先行する鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代前期（プトレマイオス朝期）の墓も含めて検討が加えられている。ユダヤ人の埋葬は鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代後期に至るまで、バビロニア捕囚を間に挟みつつも、一連の流れに位置づけられるからである。また、ヘレニズムの影響を受ける前のユダヤ人独自の埋葬習慣を把握しておくことは、ヘレニズム化によって起こった変化を適切に理解する上で必要なことである。結果として、鉄器時代Ⅱ期には横穴式の石切墓であるベンチ墓が主として利用されており、研究もそれ

に集中していることが示されている。とりわけ、家を模した墓の内部形態と集骨による再埋葬（二次埋葬）に関して多くの研究がなされており、ベンチ墓には家族が死後も共に在るといふユダ王国の人々の死生観が込められていたことが指摘されている。

続くバビロニア捕囚期からプトレマイオス朝期には、鉄器時代Ⅱ期に製作されたベンチ墓が再利用されたが、セレウコス朝期になると新しいタイプの石切墓であるロクリ墓がエルサレムに出現した。ロクリ（埋葬用の細長い壁龕）はそれ以前からフェニキアやエジプトなどヘレニズム化された周辺地域の墓で採用されており、それらがユダヤ人のロクリ墓の起源とどう関わったかが研究の争点の一つであった。また、ロクリ墓に関しては、墓のファサードや副葬品など多岐に渡る研究が行われてきたことも確認された。しかし、これまでの議論では、埋葬方法と大きく関わる内部形態の研究や定量的な研究が不足していること、ロクリ墓の研究がエルサレムとエリコのものに集中しており、その全体像が十分反映されていないことが課題であることが指摘されている。

第2章では、これらの問題を解決するため、まず前二世紀におけるエルサレムのロクリ墓と同時期のヘレニズム都市であるアレキサンドリアとマレシヤのロクリ墓の比較を行っている。長尾君は埋葬を行う部屋を母室、そこから突き出るロクリを子室と呼びつつ、エルサレムのロクリ墓は内部形態において他のヘレニズム都市の墓と異なっていることを示している。エルサ

レムのロクリ墓の母室は方形であるのに対して、ヘレニズム都市のものはより大型で長方形となっていること、また、エルサレムのロクリはしばしば遺体を安置する棚の上に位置して形状も異なっており、二次埋葬である集骨が行われていた証拠が存在することを示している。さらに、墓に入るまでの構造も異なっており、エルサレムでは地表の外部構造が服喪の空間として利用された可能性を指摘している。こうした点は、形状に類似性が見られたとしても、埋葬プロセス自体が異なっており、死生観にも違いがあったことを示唆するものである。そのため長尾君は、当該期のエルサレムの石切墓にロクリが新しい構造として導入されたことは事実であるが、それは形態の借用もしくは模倣に過ぎず、ヘレニズムの影響は限定的であったと主張している。

次に本論は、エルサレムにおける前二世紀のロクリ墓とそれに行先する鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓を比較し、ピットのある母室、特にコの字型の母室と埋葬方法が共通しており、家族を意識した死生観という点で強い連続性があったことを指摘している。エルサレムの墓のロクリは集骨に適するように独自の变化を遂げており、このような集骨のための子室はベンチ墓にもリポジトリとして一定数確認されることを示している。このことから、ユダヤ人はヘレニズムのロクリに影響を受けてはいるが、鉄器時代以来のリポジトリを母室の三辺に配して一次埋葬と集骨を伴う二次埋葬の両方を行うことができるようにしたとしている。

一方、前一世紀末から一世紀にかけては、エルサレムにおけるロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前一世紀末にオシユアリ（小型石棺）が利用されるようになる。母室の床は平坦なものが過半数を占めるようになり、壁龕にもアルコソリアなど新しい構造がみられるようになったからである。従来の研究では、オシユアリ採用の要因として復活信仰や富の蓄積が挙げられており、ユダヤ人の家族を中心とした埋葬にヘレニズムの影響で個人意識が表面化してきた可能性も考えられる。しかし、再埋葬が行われる小型石棺はヘレニズム化された周辺地域に例がないので、本論はむしろそれは再埋葬の発展として捉えるべきであり、ユダヤ人にとって埋葬は自らのアイデンティティを形成する重要な要素であったとしている。

第3章と第4章では東地中海南部地域におけるユダヤ人の埋葬の広がりをとらえるため、墓の分布状況の検討を行っている。東地中海南部地域は現在イスラエル国とパレスチナ自治区に分かれているが、パレスチナ自治区の墓に関する考古学的情報はイスラエル国と比較して圧倒的に不足しており、同自治政府の文化財管理の状況も不明瞭である。そのため第3章では、パレスチナ自治区観光遺跡庁において独自の聞き取り調査を行い墓の調査・管理状況を把握している。また、同地区において独自の考古学的踏査を行い新たな石切墓群に関する情報を公開している。

踏査についてはアブード、キルベット・クルカツシュ、シンジル、アイン・シニヤ、テル・エン・ナスベの各墓地で行われ、

墓の形態や立地、周辺遺跡についての報告と年代の概要の推定がなされている。盗掘のため情報量は限られていたが、ほとんどの墓がアルコソリアなどの構造やフレスコ、表採土器からローマ時代〜ビザンツ時代、特に一世紀以降のものである可能性が高く、前二〜前一世紀の墓はほとんど認められないことがあきらかとなった。この分布の空白は、当該時期の同地区における居住地の少なさや山がちな地形からも支持されるとしている。

こうした考古学的踏査で得られた情報と観光遺跡庁で入手した過去の調査情報に基づき、本論は前二世紀から一世紀にかけてロクリ墓の分布がユダヤ地域から周辺地域に広がっていった傾向を指摘している。ただし、第二神殿時代とその後（紀元七〇年のエルサレム神殿崩壊後）の時代の区別をつけることは現在の情報からは困難なので、一世紀以降の分布の展開については推測の域を出ない。

第4章では、さらに現イスラエル領も含む東地中海岸南部地域全体における墓の分布状況、種類、埋葬方法の違いを時期的変遷とともに議論している。その際、支配領域の違い、地形、地質、居住地、街道から墓地の立地を検討した上で、墓の分布の傾向を確認している。

前二世紀の段階では、母室の壁に複数のロクリを設ける構造とベンチ墓が結びついているのはエルサレムだけであり、それ以外のユダヤ人居住域の墓地では鉄器時代から継続するベンチ墓や横穴墓が利用されていた。長方形ロクリ墓や個人埋葬はギ

リシア人やフェニキア人の入植地でのみ確認され、地形・地質的な要因から海岸平野では石棺墓が利用されていた。このことから、前二世紀のユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響は限定的であることが議論されている。

前二世紀になると、ハスモン朝の領土拡大の影響で各地にユダヤ人居住地が作られ、それに伴うようにユダヤ地域全体でロクリ墓が広く利用されるようになった。イドマヤ地域や海岸平野にも、ユダヤ人墓地が作られたことが確認される。方形ロクリ墓は前二世紀にユダヤ人居住域で確立し、ユダヤ人を表象する墓になったと指摘している。一方、前二世紀のクムランでは中央山地とは異なる埋葬が行われており、前一世紀のヨルダンの谷の墓地群でも中央山地とは異なる埋葬が行われ、ユダヤ人の墓に形態・埋葬習慣の違いがみられるようになった。この要因はヘレニズムなどの異文化の埋葬習慣の影響ではなく、当時明確になってきたユダヤ教内の宗派や思想の違いであると主張されている。

一世紀には、前一世紀の分布範囲に加えて、ヘロデ朝期に発展したガリラヤ地域・サマリア地域にもユダヤ人墓地が作られたことが示されている。前一世紀以降は、かつてのヘレニズム化とよく似たプロセスで東地中海岸南部地域の「ユダヤ化」が進み、それに伴ってユダヤ人はロクリ墓の拡散者となっていったとされる。ユダヤ人の埋葬は一世紀になっても多様であり、前一世紀とあわせて考えると、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異なり、必ずしも一律に

規定されていたわけではないとしている。こうした多様性は、ユダヤ人とヘレニズムの関係よりもユダヤ教あるいはユダヤ人自身のあり方に多様性が生まれてきたためである可能性が高いとしている。

終章は結論であり、以上の議論から第二神殿時代後期に東地中海岸南部地域で発達したロクリを伴う石切墓がヘレニズムの影響で成立したとすることは難しいと主張している。前二世紀のエルサレム以外では、鉄器時代Ⅱ期以来のベンチ墓が用いられており、伝統的なユダヤ人の埋葬が継続されていたことは疑いない。ベンチ墓から発展した方形ロクリ墓は、母室の壁に複数のロクリを設ける点でヘレニズムの埋葬習慣の影響を受けてはいるが、家族を意識した死生観のもとで再埋葬が行われるという根幹を変えることはなかったとされる。後世に文書化されたミシユナはロクリ墓をユダヤ人の墓として規定しており、それがユダヤ人の典型的な墓として認識されていたとされる。

一方、長尾君は第二神殿時代後期を通じてユダヤ人の埋葬に多様性があることも指摘している。特に前一世紀のヨルダンの谷の墓の形態や埋葬習慣は、中央山地や海岸平野のユダヤ人のものとは異なっていた。また、前一世紀末からオシユアリが採用され、ユダヤ人の主たる埋葬方法も変化した。しかし、方形ロクリ墓以外の墓もオシユアリも、ヘレニズムなどの異文化の埋葬習慣とは結びつけられていない。そのため、ユダヤ教あるいはユダヤ人が自らの在り方を問い、さまざまな宗派が生まれてきた状況の結果である可能性が高いとしている。前一世紀に

ユダヤ人を表象する墓となった方形ロクリ墓は、埋葬方法がオシユアリへと変化しても、家族を意識した死生観のもとで行われる再埋葬という点で変化しておらず、総じて、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響は限定的であったと結論づけられている。

審査要旨

本論は、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域に出現したロクリと呼ばれる埋葬用壁龕を伴う石切墓を考古学的に分析することによって、ヘレニズムと直面したユダヤ人がそれとどのように向き合い、独自の文化を生み出したのかを解明する意欲的な研究である。「ユダヤイズムとヘレニズム」は現代まで西欧文化の基層をなす二つの大きな思潮であり、これまでも文献史学や宗教学などさまざまな視点から研究されてきた。しかし本論は、ロクリ墓という考古学的遺構の分析を通して、ユダヤ人がヘレニズムと接触した最初の時点における対応をあきらかにしている点で極めて独創的な研究だと評価することができる。本論の意義は、以下の四点に大きくまとめることができる。

一点目は、ロクリ墓の構造の分析から、これらの墓に認められるヘレニズム的要素は表面的な類似にとどまり、想定される埋葬プロセスはヘレニズム都市の墓と大きく異なることを示している点である。これまでのロクリ墓研究では、ロクリは他のヘレニズム都市の墓にもしばしば見られる要素であり、ファサードにもヘレニズム様式の建築裝飾が見られることがあるた

め、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてきた。しかし、ユダヤ人のヘレニズムに対する反発は大きく、セレウコス朝に対してはハスモン戦争、ローマに対してはユダヤ戦争を起こすほど抵抗しており、ミシユナがロクリ墓をユダヤ人の墓だとする認識とも整合しない。本論は、こうした二つの思潮の間でユダヤ人たちがどのような死生観のもとで独自の墓を發展させたかを解明している点で、当該地域の墓地研究を一步も二歩も前進させたすぐれた貢献だと評価することができ

る。二点目の意義は、こうした構造上の特徴を定量的に示していることである。本論は、すでにロクリ墓について七九三基の集積が作られており、そのうち第二神殿時代後期のものは前二世紀のものが一七基、前一世紀のものが八四基、一世紀のものが七五基あることを示した上で、異なる内部構造を持つ墓が時期ごとにとどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内部構造は埋葬プロセスを反映する重要な部分であるにもかかわらず、これまでの研究は建築装飾や共伴遺物などの分析に終始し、研究上の取り組みが不足していたからである。

本論はまず長尾君が母室と呼ぶ埋葬室が基本的に方形であり、より大型で長方形になるヘレニズム文化のロクリ墓とは異なることを指摘している。また、母室の中央部分の床がピット状に掘り窪められ、周囲に遺体を安置する柵を持つ構造になっていたことに注目し、それらにコの字型、ロの字型、外周型があることを示している。また、それぞれの型式の出現頻度を示した

上で、それらが鉄器時代（イスラエル王国時代）以来の家族墓であるベンチ墓と共通していることを指摘している。このピットは前二世紀から前一世紀の間は維持されたが、一世紀になると平坦化することも定量的に示しており、それはオシユアリによる埋葬が導入されたためだとしている。

また、母室の側壁に掘り込まれるロクリという壁龕の構造についてもヘレニズム文化の墓とよく似た標準型の他に幅広型や小型のもの等の多様性が存在することを示し、ロクリの導入自体にヘレニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄器時代から知られている集骨のためのリボジトリ（集骨室）と関連することを指摘している。集骨は、一次埋葬で腐敗した骨をそれ以前から埋葬されていた家族の骨と合わせて埋葬する二次埋葬のことである。ヘレニズム文化の墓では、基本的にロクリ一本に一個人の遺体が埋葬され、名前も刻まれることが多いのに対し、ユダヤ人のロクリ墓ではロクリや柵に複数の遺体やオシユアリが置かれるなど、被葬者の個別性に対する意識ははるかに低いものとなっている。

三点目の意義は、本論がこれまで集中的に研究されてきたエルサレムやエリコのロクリ墓だけでなく、その周辺地域の事例特にパレスチナ自治区の石切墓を独自調査に基づいて含めていることである。南レヴァント地域における考古学的調査は、常にイスラエル国とパレスチナ自治区の政治的対立のためにパレスチナ側の情報が欠け、全体像をつかむことが難しいという問題点が存在する。しかし、本論ではアブード、キルベット・ク

ルカツシュ、シンジル、アイン・シニヤ、テル・エン・ナスベというエルサレムの北に存在する墓地群の踏査を行い、新資料を公表している。結果的にこれらの墓地は年代的に一世紀以降の物である可能性が高いことがわかったが、このことは前二世紀のエルサレムで始まったロクリ墓が遅れて周辺地域に広がっていった様子を示すものとなっている。

四点目の意義として、本論はユダヤ人居住地が広がった一世紀以後も、地中海岸やガリラヤ、サマリア、イドマヤ地域、ヨルダンの谷沿いで異なる埋葬法が行われていたことを示している。なぜそのような違いが生まれたのかについては議論の余地があるが、これらの違いを総合的に示したことには一定の意味があるであろう。

このように本論の持つ独自の学術的意義は疑い得ないが、さらに検討すべき点が残されていることも事実である。前二世紀から前一世紀のユダヤ地域のロクリ墓が、ヘレニズム文化の墓と比べて被葬者の個性に対する意識が低く、むしろ家族墓としての意識を維持していたという指摘は評価できるが、ピットがなくなりオシユアリが登場した一世紀にもまだその死生観が継続していたのかどうかは、長尾君の検討を経たうえで、なお異論の余地があるように思われる。オシユアリは基本的に個人の棺であり、墓室内に複数集積されるとしても、そこにヘレニズム的な個人意識の萌芽を読み取る見解を完全に排除することは難しいからである。同様にロクリについても、たしかに用法などに違いは認められるが、その導入自体がヘレニズムの影響

である点是否定できず、本論はヘレニズムの影響を狭くとらえずにすぎているとの批判を受ける可能性がある。一世紀における地域による埋葬習慣の違いを宗派の違いと結びつけている点も、現状では可能性の提示にとどまっており、今後のより詳細な分析が求められる。

また、本論は基本的に考古学的な分析結果を基盤として議論を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究の成果との関係をもう少し丁寧に検討することも可能だったのではないかと思われる。とりわけ、前二世紀から一世紀は旧約聖書ダニエル書や偽典に代表される黙示文学が発達し、個人の終末論に関する概念が明確化された時期とされている。それと実際の埋葬との関連性を論じることは本研究の価値をさらに高めるものとなったであろう。さらに、二次埋葬は移動牧畜民の間で広く知られた習慣であるが、なぜユダヤ人がその習慣を維持し続けたのかについても、家族意識の継続とともに検討すべき課題のひとつだったと考えられる。

このように、なお改善の余地は残されているが、それは本論の持つ本質的な意義を損なうものではなく、長尾君の今後の研究指針となりうるものであろう。本論はユダヤ人がヘレニズムと直接接触した際の文化変容の具体的な様相を、これまで十分なされてこなかった石切墓の内部構造の分析を通してあきらかにしたもので、独自資料の提示とも合わせ、その独創性と学術的貢献は極めて高い。以上のことから、審査員一同は、長尾琢磨君の本博士号請求論文を学位授与にふさわしいものと判断す

る。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員

杉本 智俊

副査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員

安藤 広道

副査 金沢大学人文学類教授・資料館館長

足立 拓朗

藤澤綾乃君博士学位請求論文審査報告

論文題目

「教会堂及び修道院建築の変遷から見た

初期ビザンツ期ユダヤ・サマリア地方のキリスト教化」

論文の概要

藤澤綾乃君の博士学位請求論文は、初期ビザンツ期のパレスチナにおけるキリスト教化の経緯とその在り方を教会堂及び修道院の建設状況の変遷から探り出すことを目的としており、とりわけエルサレムを含むユダヤ・サマリア地方に焦点をあてている。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世紀前半のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認とともに教会堂建設が盛んになり、巡礼者の往来も活発になったとする説が一般的であった。ところが近年、キリスト教が広く受け入れられたのは早くとも五世紀後半からであり、それ以前は都市部に限定された宗教であったという見解が一部の研究者たちから主張されるようになってきている。この見解は近年の考古学的調査の成果に基づくものとされ、ユダヤ・サマリア地方はネゲブ地方やガリラヤ地方と比べてキリスト教化が遅かったと主張されている。

こうした見解の違いが生じる大きな理由は、考古学的調査による各遺構の年代決定が曖昧なことである。古い報告書の多く